

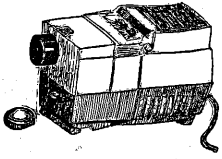
## 島根県農業試験場の巻(試験場・研究所めぐり133)

誌名	農業技術
ISSN	03888479
著者	上野, 良一
巻/号	33巻1号
掲載ページ	p. 38-39
発行年月	1978年1月

農林水産省 農林水産技術会議事務局筑波産学連携支援センター  
Tsukuba Business-Academia Cooperation Support Center, Agriculture, Forestry and Fisheries Research Council  
Secretariat



## 島根県農業試験場の巻



(試験場・研究所めぐり 133)

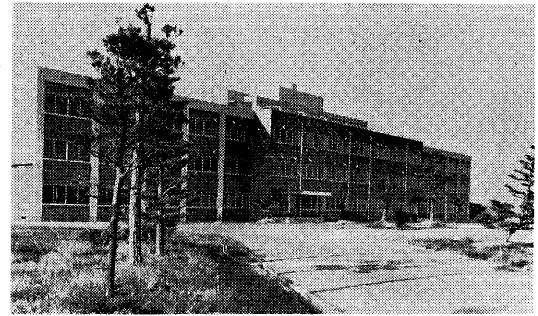
八雲たつ出雲。往古の伝説を秘めて流れる斐伊川に育まれ、地味豊かな簸川平野。整然と刈込まれた築地松をめぐらす農家が点在する簸川平野。その西南の一角、出雲市郊外、芦渡町の高台、松林にくっきり映えるレンガ色の建物——それが新装なった島根県農業試験場である。

昭和50年9月25日、農業試験場では新築移転ならびに創立百周年記念式が行われた。明治8年、前身機関の樹芸試験場が県庁構内に創設されてから植物試験場、福富育種場と変り、明治29年に農事試験場となり、昭和49年、現在地への移転を機会に蚕業試験場と統合し、全国で一番おそく農業試験場とその名称を改めた。またこの間、八東郡乃木村（松江市乃木福富町）から簸川郡塩冶村（出雲市塩冶町）を経て現在地と三度にわたる移転を経験してきた。この百年の風雪に耐え、ひたすら島根県農業とともに歩み、数々の輝かしい業績をあげてきた農業試験場は、今また新しい世紀にむかって、陣容を整え、力強く、その第一歩をふみ出すことになった。

明治40年、農商務省農事試験場山陰支場あと地に移転してから70年、住みなれた塩冶町の農事試験場が、都市化の進展、都市計画事業の実施によって寸断されるかたちになったため、昭和44年から移転整備事業をはじめ、土地買収、圃場の整備、建物敷地の造成、オイルショックによる異常な物価高騰のため、一部工事の繰延べなどを折込みながら本館、附属建物の建築を進めて、昭和49年11月に移転し、その後も引続き附属建物、施設、備品の整備を行い、また創立以来はじめて本場に設ける果樹園の造成を完了、あと果樹関係の附属建物の建設を残すのみというところまでこぎつけた。移転整備に着手して既に8年の歳月が流れているが、この間における農業の変化は誠に大きかった。農業に対する考え方も変ってきた。それでも着実にここまでこれたのは試験研究は農業発展の中核であるとの認識が関係者に強かったことを意味するものといえよう。

総面積は31.5ha、田7.1ha、畑3.1ha、果樹園9ha、桑園5.6ha、宅地、道路その他6.7haと旧試験場より一回りも二回りも大きくなっている。本館は鉄筋コンクリ

ート3階、一部4階建、東西85m、南北16m、延5,343m<sup>2</sup>、付属建物は36棟、7,547m<sup>2</sup>で、まずまずの規模である。本館1階は場長室、次長室、総務課など場の中枢機能と経営、農業機械、蚕業関係各科の研究室、実験室ならびに専門技術員室、当场自慢の農事相談室、2階には土壌肥料関係の最新を誇る実験室がズラリと並び、これに作物科の研究室、実験室、3階は病虫害科の充実した実験室が大半を占め、これに野菜、花き、果樹各科の研究室、実験室と大会議室があり、4階は整然とした図書室、閲覧室となっている。付属建物は各科圃場の隣接地にある関係で、やや分散のかたちとなっているが、大型の育蚕実験棟など蚕業関係、天敵飼育棟、ガラス室など病虫害、土壌肥料関係ならびに製茶試験棟の一群、脱穀調整室、ライ



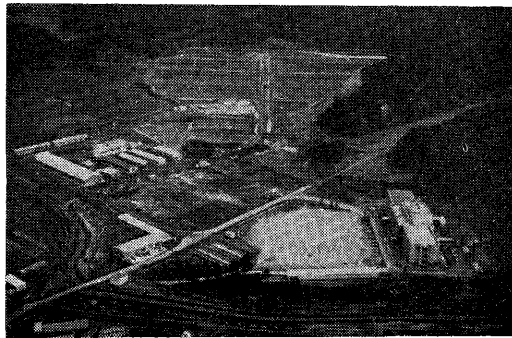
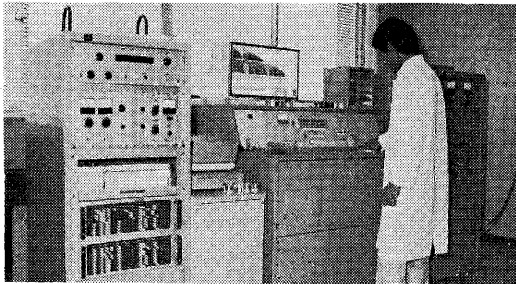
スセンターなど作物、農業機械関係の一群、三水準温室、ミスト温室など野菜、花き関係のガラス室、大小のビニールハウス群と3カ所程度にまとめている。このほか大規模なライシメーター、種子低温貯蔵庫などの施設があり、また広い果樹園に隣接して果樹調査管理室棟、選果場・温室などの建築ははじめられつつある。

農業試験場の組織、機構は創立以来幾多の変遷を経てきているが、現在は場長（尾添茂）、次長（片寄久雄、村上英行）のもとに、総務課（主査：小原康英）、作物科（科長：高海幸夫）、野菜科（科長：上野良一）、花き科（科長：斉藤斉）、果樹科（科長：竹下修）、病虫害科（科長：石井卓爾）、土壌肥料科（科長：村上次長兼務）、環境保全科（科長：山根忠昭）、経営調査科（科長：佐藤孝彦）、農業機械科（科長：高野総十郎）、養蚕科（科長：安川智登）、栽桑科（科長：斉藤肇）、蚕糸応用科（科長

\* 尾添茂場長の近影（上の写真）と49年11月に完成した新しい本館風景。

：斉藤肇兼務)の13科に赤名分場(分場長：新田英雄)、浜田分場、荒島分場(分場長は場長兼務)の3分場、敬川、大社の2試験地を配し、いわゆる総合的な試験場として、事務9名、研究75名、技能25名、計109名の職員が試験研究に励んでいる。

尾添場長は病理出身、麦の黄銹病に関する研究で日本植物病理学会賞をも受けた著名な研究者であるが、行政手腕も高く、この困難な移転整備をなとしげた最大の功労者といえる。最近の農業情勢はきびしく、試験研究の



在り方をめぐっての論議も喧しい昨今である。行政組織の再編整備、試験研究機関の組織整備と行政、普及、研究の一体化をめぐって、ここ1年、農業試験場も揺れ動いてきたが、場長は就任以来、水田表裏作など土地の高度利用と生産安定、本県農産物の特産化と生産技術の確立、県内各地におこっている技術的、経営的問題点の早期解明、水田転換畑などを含めた畑作物の振興と生産技術の確立を試験研究の柱として場員を指導してきている。また試験場は農家のためにあるもの、農家に親しまれ、信頼されるものでなければならぬとし、誰でも気軽に出入りし易い農事相談室を設けるとか、“農業試験場だより”を年に数回発行し、新しい研究成果の解説、場内の動き、見学案内を掲載している。このほか研究課題の選定にあたっては、広く農家、普及、行政の要望に応えるようにつとめている。

\* 分析に威力を発揮する蛍光X線分析装置(上の写真)と試験場遠景(果樹園場と本館、付属建物)。

農業試験場に対する信頼はやはり革新的な技術開発を行うことによって高められるが、最近における最大のニュースはハウスデラウェアの着色障害対策の研究であった。島根県は全国一のハウスデラウェアの生産県であるが、俗にゴマシオといつて、着色した果粒の間に着色しない果粒が混る障害果の発生が多く、その被害は2億円以上といわれていた。この問題について栽培、土壤肥料、病害虫の研究員がプロジェクトチームをつくり、昭和47年以来研究を続けた結果、ついに発生の主な原因はマンガン不足によるものであることをつきとめ、硫酸マンガンを果房を中心に葉面散布することによってほぼ完全に防止できることを明らかにした。この研究は異例の知事表彰を受けた。

水田作関係では“シマネニシキ”の育成、斑点米の原因となるカメムシ類の生態究明と防除法の確立、畜産農家のわら不足の悩みを解消するコンバイン排出わらの収集と乾燥に便利ならわら束連結装置の開発、排水促進のためのもみガラ暗渠造成機の開発、畑作では飼料用大麦の夏まき年内どり栽培技術の確立が県内外で注目されている。野菜ではジャンボワサビと呼ばれる“さんべ”など新品種の育成、新しい畑ワサビの遮光栽培法、我国ではじめて発見したワサビクダアザミウマの生態究明と防除法、墨入病の新しい防除法の確立など伝統を誇るワサビ関係の業績が目立ち、また山間地におけるトマトの長期多段どり栽培法と省力整枝法の開発、花きではチューリップ球根腐敗病のための短時間大量消毒法の開発、果樹ではハウスデラウェアの省燃料加温法の開発、二十世紀ナシの黄白葉発生原因の究明と対策、傾斜地クリ園のモノゴマグラメイガの安全で省力的な防除法の開発、さらに公害関係ではカドミウムとヒ素で汚染した水田の稲作改良と土壌改良法、我国では全く例をみないモリブデン過剰による水稻の生育障害と改良対策、蚕業関係では桑園の土壌類型別地力増進法の確立、稚蚕人工飼料育の実用化など顕著な成果を数多くあげている。

現在実施中の試験研究課題は実用化技術組立試験の山陰の水田地帯における稲麦一貫高能率生産技術組立試験をはじめ、総合助成試験、指定試験、受託試験、県単独試験を合わせて126課題に達している。さらに水田総合利用に関連して排水促進法と畑作物、野菜の栽培試験、地域農業複合化のための技術開発、中海干拓をはじめとする大規模農用地開発地域における営農対応など新しい流れに即した試験研究も重要課題となってきた。

農業試験場へは国鉄出雲市駅下車、ハイヤー利用が最も便利、知井宮行バスで神門嘉儀下車、南へ徒歩10分という方法もある。(上野良一)